

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19790378

研究課題名 (和文) チューブ類の自己抜去リスク・アセスメントツールに関する研究

研究課題名 (英文) Risk assessment tool for self-removal of tubes

研究代表者

藤田 茂 (FUJITA SHIGERU)

東邦大学・医学部・助教

研究者番号：50366499

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：境界医学・医療社会学

キーワード：リスクマネジメント

1. 研究計画の概要

本研究では、患者がチューブ類の自己抜去を起こす危険度を事前に評価し、適切な対応の選択を可能とする「自己抜去リスク・アセスメントシート」を、エビデンスに基づいて統計的な手法を用いて開発し、その有効性を検証することを目的とする。

患者によるチューブ類の自己抜去に関する研究で先行する欧米の文献を中心とした文献調査等により試作された自己抜去リスク・アセスメントシートを、東邦大学医療センター大森病院（以下「当院」）で試験運用し、その問題点を修正する。さらに、当院で収集されたデータを統計処理することにより、各リスクファクターの重要度を評価したうえで、リスクファクターの取捨選択を行い、アセスメントシートを改良する。

2. 研究の進捗状況

平成19年度は、主に PubMed と医中誌を中心とした文献調査を行った。文献調査では、主に患者安全管理やエビデンス（実証データ）の収集で先行する欧米の研究成果をとりまとめ、チューブ類の自己抜去にかかわる情報を収集し、そのリスクファクターを洗い出す作業を行った。その過程において、自己抜去や事故抜去に係る各種のリスクファクターが列挙されたほか、リスクファクターはチューブの種類によって異なることや、各種チューブの自己抜去の発生率等の情報が得られた。文献調査で得られた情報から「自己抜去リスク・アセスメントシート」の試案を作成するにあたり、アセスメント対象のチューブの種類を絞り込む必要があることが分かった。

平成20年度は、当院において、平成19年度の文献調査により明らかにした自己抜去のリスクファクターにもとづいて情報収集用の調査票を試作し、その調査票を使用して各種チューブを装着している患者の状態について情報収集を行った。平成20年8月から平成21年1月まで情報収集を行ったが、自己抜去を起こした患者の情報が十分に収集できなかったため、情報収集期間を平成21年3月まで延長し、情報収集に努めた。

平成21年度は、平成20年度に得られたデータについて統計的検討を行い、自己抜去リスクアセスメントシートの試作をしたが、感度・特異度に改善の余地があることが判明した。チューブの種類により各評価項目の重みが異なるため、感度・特異度を高めるためには、チューブの種類に応じた自己抜去リスクアセスメントシートの開発が必要であると考えられた。そこで、調査対象を中心静脈カテーテル (CVC) に絞り、改めて平成22年1月から4月までの予定で一部のデータを収集しなおした。

3. 現在までの達成度

当初の予定通りには進展していないが、逐次研究上の課題の解決に取り組んでいる。

(理由)

上述した通り、自己抜去リスクアセスメントツールを試作したが、その感度・特異度に改善の余地があったため、評価対象のチューブをさらに絞り込み、改めて一部のデータを収集しなおす等の対応が必要になった。

4. 今後の研究の推進方策

自己抜去のリスクアセスメントの対象を

中心静脈カテーテル (CVC) に絞り込み、CVC の挿入理由やインフォームドコンセントの有無、挿入時の合併症の有無等のデータを収集しなおす。過去の収集データについては、診療記録を参照し、上記のデータを補完する。その後、再度分析し直し、「CVC の自己抜去リスクアセスメントシート」を作成する。また、そのシートの感度・特異度を算出し、臨床現場で活用可能か評価する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計2件)

- ① 藤田 茂，長谷川友紀：チューブ類の自己抜去のリスクファクター，第46回日本医療・病院管理学会学術総会，静岡(静岡県立大学)，2008.11
- ② 藤田 茂，長谷川友紀：チューブ類の自己抜去に関する文献調査，第10回日本医療マネジメント学会学術総会，名古屋(名古屋国際会議場)，2008.6